

中世禅宗における語録抄の研究 (二)

―『臨濟録』の抄を中心に―

安 藤 嘉 則

A Study of the 'Gorokushō' in the Zen Sect in Medieval Japan (2)

Yoshinori ANDO

一、はじめに

『臨濟録』という語録は、中世禅林の中でも特に臨濟宗の禅僧たちによって宗祖の祖録として尊ばれ、提唱や室内参禅において参究されていたのであるが、意外にも中世末期から近世初頭の曹洞宗の禅僧たちの語録（代語文献など）においても、『臨濟録』からの引用がなされ、その拈提が代語・著語という形で示されている。また同時に『臨濟録』に基づく古則が洞門門参文献にしばしば扱われ（『臨濟松栽』・『剣刃上事』等）、さらには『臨濟録抄』も曹洞宗寺院において成立し書写されている。無論その数は臨濟宗の方が圧倒的に多いのであるが、いずれにせよ、中世から近世初頭の禅林において『臨濟録』は、洞済を超え

て影響のあつた語録であつたといえるであろう。

ところで前述のごとく中世の禅僧たちはこの『臨濟録』を用いて会下に対する接化をなしていたのであるが、その中からいわゆる『臨濟録』の抄と『臨濟録』の密参を記した文献が成立している。いわゆる中世禅宗文献の分類でいうならば、語録抄と密参録という二つの形態の文献である。両者は『臨濟録』を共通の拈提対象とするものの、前者は会下に対して、ある程度公開的な講義・提唱を前提とし、後者は室内における師資の問答を前提として成立したものである。本稿では『臨濟録』を商量した中世から近世初頭の典籍を全体的に紹介し、これらが如何なる門流の中で成立しているのかを系統立てて整理してい

くことを試みるものである。こうした研究は、各語録抄の抄文や密参録の著語等を全体的に比較検討しなければならないが、膨大な時間が必要となるので、先学の研究をまず紹介し、これに基づきながらいくつかの新たな知見が提示できればと思う次第である。

まずこの『臨済録』の抄・密参録に関する文献紹介として看過できぬ成果は、金田弘氏による「松岡文庫禅籍書目解題稿——碧岩録抄・臨済録抄・無門関抄・五家正宗贊抄・虚堂録抄・各種密参録など——」（『国語研究』第三十七号、昭和四十九年）という論稿である。これは松ケ岡文庫に所蔵される語録抄や密参録を全体にわたって資料紹介をしたものであって、中世禅籍研究において重要な資料が紹介されているが、九種類の臨済録抄（四二―四四頁）といくつかの密参録が紹介されている。

また臨済録抄に関する研究としては次のような先行研究が特筆されるであろう。

- (1) 中山成二「万安英種述に擬せられる抄物（二）——臨済録鈔について」『曹洞宗研究員研究生紀要』第一〇号、昭和五十三年
- (2) 柳田征司「大応派の『臨済録抄』について」『松ケ岡文庫研究年報』第六号、平成四年。
- (3) 飯塚大展「駒沢大学蔵『臨済録抄』について——臨済録の講義と密参との関係を中心に——」『曹洞宗研究員紀要』第二十三号、平成四年。

この中、(一)の中山氏の論稿は、いわゆる「万安抄」といわれる江戸初頭に刊行された一連の抄物文献の研究の一環としてなされたもの

であるが、この論文では寛永九年刊行の『臨済録抄』について従来万安英種撰述として伝えられてきた説を否定し、さらに他の多くの抄について調査して（大徳寺系五本、妙心寺系三本）、万安抄が妙心寺派の影響によって成立した抄であることを明らかにしている。また万安抄と妙心寺系の二写本（いずれも松ケ岡文庫蔵）との対照表を示し、相互の関係について検討しており、さらには妙心寺派以外の系統の諸写本の成立に関しても重要な指摘を提示している。

次に(2)の柳田征司氏による研究は、中山氏の研究を受け、さらに多くの臨済録抄を取り上げ、十五種類の抄に分類整理する。この論稿ではこの中の八本について調査し、これらを、1、大徳寺系抄、2、妙心寺系抄、3、傍流系抄に分類する。まず大徳寺系『臨済録抄』としては、尊敬閣文庫本（八冊）・足利学校本（一冊、零本）、駒沢大学本（三冊）、松ケ岡文庫蔵の沢庵抄（四冊）の四種を詳細に検討し、また妙心寺系としては万安抄を中心に検討する。また傍流系としては京大文学部哲学閲覧室蔵の写本（一冊）、市立飯田図書館蔵の写本（二冊）について検討を加えており、一連の『臨済録抄』に関して、かなり網羅的な情報を得ることができる。

さらに(3)の飯塚大展氏による研究では、駒沢大学蔵の『臨済録抄』を中心にその抄の成立問題、密参録との関係について考察され、また大徳寺派の尊敬閣文庫蔵の『臨済録抄』、さらには『大徳寺夜話』も加えて検討され、当時の大徳寺派の臨済録講義や入室参禅との問題について考察されている。

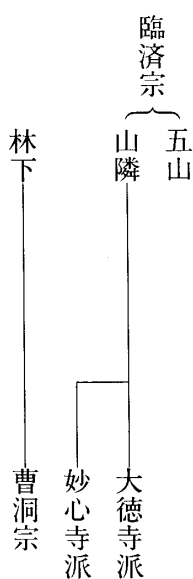
さて以上のような先学の研究を受けて、本稿ではこれらの臨済録抄

を全体的に整理づけてみたい。

二、臨濟録抄の各系統について

まず今日現在する『臨濟録抄』は大きく五山で成立した抄と山隣・林下で成立した抄に分けられる。そして山隣・林下では、臨濟宗系の大徳寺派・妙心寺派・幻住派、そして曹洞宗系の抄が残されているが、やはり圧倒的に多く残されているのが、臨濟宗の中でも大徳寺派と妙心寺派の抄である。

語録抄（漢文抄・仮名抄）の系統別分類



そこで先学の指摘も改めて引用しながら各写本について、その成立や書写の年代、あるいは引用される僧名などを指摘して以下のように系統付けを行ってみた。ただし現時点で未見の資料もあり、その場合は先行研究の紹介に基づいた。

〔臨濟録抄のリスト〕

【五山系】

- ① 「臨濟録抄」、蓬左文庫蔵（部門一〇四、番号七五）、写本、一冊、八七丁。カナ抄である。跋文に「此録者一韓和尚在安養丈室所講也。予僅聞一二抄之恐汚却。和尚舌頭。希門下同聞衆是正而雪焉。」

永正九年壬申六月十八日 清三志」とある。「一韓」とは一韓智翹、

「清三」とは笑雲清二であり、ともに聖一派で大慈門派に属する（『五山禅林宗派圖』一〇六頁）。ただし序文の抄に「宣和二年庚子凡二百五

十三歳。自宣和二年庚子至本邦明應元年壬子凡三百七十二年也。自

唐懿宗咸通八年丁亥、本邦元龜四年癸酉凡七百八十八年矣。」（七丁表）

とあるので書写年代は元龜四年（天正元年）以降となる。

- ② 「惠照禪師語録」、蓬左文庫蔵（部門一〇四、番号四八）、写本、一冊、五一丁。延徳三年（一四九二）の五山版を書写したテキストに首書形式で注解・抄を施したもの。特に前半部に多くの抄文が記されている。年紀として二丁裏に「本邦人王五十七代清和天皇貞観九年丁亥□也。至元龜三年壬申也。凡七百七年矣」、四丁裏に「自唐懿宗咸通八年丁亥至本邦明應元年自改元壬子凡六百二十六年、至元龜三初春、自馬防序 宋八代主徽宗宣和庚子二年至本邦明應元年壬子凡三百七十二年」という記述がみえる。抄文中には「大應曰」・「竜宝曰」とあって大応国師・大燈国師の語が引用されている。また奥書には次のような西川宗洵と万里集九の跋文がみられる。

舌卷雪風毫挟神、乾坤只有一詩人、古来誤認白拈賊、不識梅花偷却春、右拙偈者、以梅花無尽蔵、巖命之、故書其後、慚顔々々。

明應庚申蜡月日 埜釈宗洵

清数回春老人寫余所書之臨濟語録首諸件其勤如是也。卷末之一頌、龍徳和尚之證明

文龜元年九月十二日 万里漆桶書之

【大徳寺派】

①「臨濟抄」、東福寺靈雲院藏、写本、一冊、八五丁。序文の注の中に「咸通八年ハ政清和天王貞觀九年ニアタル今大永^丙六年六百六十年也」とあり、八五丁裏の左スミに「大永丙戌秋八月九於兩足院下書之 東□子十七歳」とある。本抄は大応国師・大燈国師・徹翁・大用和尚（養叟宗頤）・大光国師（通翁鏡円）の語が引用されており、明らかに大徳寺派の抄である。なお、本抄は東京大学史料編纂所に写真撮影本が所蔵されており、これを閲覧した。

②「恵照禪師語録口義」（内題）、松ヶ岡文庫藏（クハ・四九四、一一二）、写本、上下二巻、上巻一〇一丁、下巻九四丁、計一九五丁。題簽は「臨濟慧照禪師語録抄」、表紙に「此鈔本足利中期即天文丙申三鈔本也、何人ノ鈔ナルヲ知ラサルモ内ニハ梅菴鈔ヲモ引照委曲ヲ極メタリ、蓋稀観ノ珍籍也、京都竹遷堂書肆ニ求ム 積翠軒誌」とある。本抄について、尊敬閣文庫本との近い関係が飯塚氏によって指摘されている。

③「臨濟録抄」、尊敬閣文庫藏、写本、八冊。各冊の冒頭一七丁上部に「長劔萩府正宗山洞春禪寺什物」とあり。本抄については「丁亥正月十日示寂当本朝ノ清和天皇ノ貞觀九年ニ至今本朝明応二年癸丑得六百二十八歳一矣」（第一冊、三〇丁表）・「唐懿宗咸通八年丁亥ヨリ本朝天文二十一年壬子マテ六百八十六年也」（第一冊、三十丁裏）・「懿宗咸通八年、日本ノ清和天皇御宇貞觀九年ニ当、今至大永四年甲申六百五十八年也。^{天文廿二年癸丑マテ六百八十七年也}」（第八冊、八七丁表）といった年紀の記述が見られ、柳田征司氏は「先行する二回の抄を承けて天文二一・二二年に書写されたものと推定される」と述べて

いる。さらに柳田氏は大応国師・大燈国師の他、徹翁義亨・通翁鏡円（大光国師）・白翁宗雲・海岸了義・月菴宗光・華叟宗曇・養叟宗頤・春作禪興・春浦宗熙（大宗禪師）・東溪宗牧といった大応下でも大徳寺派を中心にした僧名やその説が引用されていることを確認し、大林宗套によって成立した抄としての可能性を指摘する。（柳田、四〇―四六頁）また飯塚氏によって「松ヶ岡文庫本と尊敬閣本は極めて近い関係にある」（飯塚、前掲論文、六一頁）ことが指摘されている。（この松ヶ岡文庫本とは松ヶ岡文庫のクハ・四九四の天文三年の抄本である。）

④「臨濟録抄」、足利学校遺蹟図書館藏、写本（零本）、一冊、筆者未見。「咸通八年ハ日本清和天皇貞觀九年ニ当ル。今至天文第五丙申已得六百七年也」（七〇丁裏）という年紀があり、天文五年に成立した抄とされる。また大応国師・大燈国師・峰翁祖一・徹翁義亨・白翁宗雲・養叟宗頤・言外宗忠の僧名やその説が引用される。（柳田、四六頁）

⑤「臨濟録抄」（題簽）、駒澤大学図書館藏（魯一六三・一一三）、写本、三冊、上巻七三丁・中巻九二丁・七〇丁。本抄は昭和五〇年に駒沢大学文学部国文学研究室編輯による『禪門抄物叢刊』10の『臨濟録抄』として影印刊行されている。年紀に「自咸通八年丁亥至本朝天文廿二癸丑六百九十年也」（影印本四五七頁）とあり、また大応国師・大燈国師・峰翁祖一・徹翁義亨・通翁鏡円（大光国師）・白翁宗雲・海岸了義・言外宗忠・月菴宗光・華叟宗曇・養叟宗頤・春浦宗熙（大宗禪師）・大虫全岑・日照宗光・一休宗純といった僧名やその説が柳

田氏によって確認されている。(柳田、四七―四八頁)

- ⑥「臨濟録抄」、松ヶ岡文庫蔵(クハ・五〇二)、写本、上下二冊、上巻六五丁・下巻六〇丁。下巻末の奥書に「這一冊紫野諸大老秘密蔵也偶得 泉。一凍和尚所筆之正本、非是香火因縁所冥合、則争遂此年之素志乎哉。皆正保第四龍集丁亥林鐘十有九日。染毫夷則初六日於武陵下谷之旅店終書写之功焉」とある。これによると大徳寺一二六世一凍紹滴筆の写本を江戸下谷にて正保四年に書写したもの。開山(大燈国師)・徹翁義亨・華叟宗曇・養叟宗頤・春浦宗熙・実伝宗真・春作禅興などの語が引用される。

- ⑦「臨濟録抄」、松ヶ岡文庫蔵、(無番号)、写本、四巻四冊、題簽に「五逆人聞雷」とあり、四巻にそれぞれ「頓」・「漸」・「秘」・「密」の巻名が見られる。また題簽には「澤菴」の印が押されている。本抄は沢庵宗彭自筆本として昭和一三年重要美術品に認定されている。序の抄文中には「此序ハ自二迁化懿宗咸通八年丁亥一至三宋徽宗宣和二年庚子凡二百五十四年目也、以曆推考之本朝鳥羽院保安元年二相当、今茲寛永四年丁卯已得五百八年臨濟迁化唐咸通八年丁亥正月十日後二百五十四年当宣和十二年庚子自迁化七百六十一年也、即今茲寛永四年丁卯也。」とあり、寛永四年の書写本である。抄文中には大応国師・大燈国師・徹翁義亨・通翁鏡円(大光国師)・白翁宗雲・海岸了義・言外宗忠・月菴宗光・華叟宗曇・養叟宗頤・春浦宗熙(太宗禅師)・別伝□授・玉甫宗琮などの僧名が指摘される(柳田、五〇―五一頁)。なお本抄については、特に古田紹欽氏による詳細な研究(『松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集解題』岩波書店刊、一七―二五頁)がある。

- ⑧「林才録抄」(題簽)、松ヶ岡文庫(ハ・一一五六)、写本、四冊、第一冊、八三丁・第二冊八八丁・三、四〇丁・四、四九丁。⑦の沢庵宗彭抄(無番号、四冊)の江戸期の転写本である。⑦の序には寛永四年の年紀が記されているが、本写本にはこの年紀の部分を欠いている。

- ⑨「臨濟録鈔」(題簽) 禅文化研究所蔵(ズ二―二八五二)、写本、一二七丁。最終丁に「承應二歳仲夏書焉」とあり。内容は⑦の沢庵自筆本と同じ。

【妙心寺派】

- ①「臨濟録抄」(題簽)、京都大学文学部哲学閲覧室蔵、写本、一冊、一四八丁。末尾に「咸通八年丁亥ヨリ本朝永禄十二年^{己巳}至百十歳平」、景聰興昂や東陽英朝などの僧名が見え、妙心寺派の他の抄と共に通な記述をもつことから、妙心寺派の抄と位置づけられる。

- ②「臨濟語録鈔」(題簽)、松ヶ岡文庫蔵(ハ・一一五七、一一二二)、写本、二冊。表紙見返にそれぞれ「臨濟語録鈔 上」・「臨濟語録鈔 下」の題簽あり。上下二巻、上巻、一五三、下巻、一二二丁。下巻一二〇丁裏に「抄云、咸通八年丁亥、至本朝長享三年己酉、凡得五百六十三歳也。至永禄十二年己巳、六百四十三載歟、至于慶長八年癸卯凡得六百七十七載歟。」とある。

- ③「臨濟録抄」、松ヶ岡文庫蔵(クハ・五〇七)、写本、上下二冊、上巻一〇七丁、下巻一六丁。全二二三丁。上巻一一丁裏に「自宣和二年庚子、至本邦明應元年壬子^上、凡三百七十五年也。合六百二十八

年也。自明應二年^{癸慶長五年}慶長五年^{子庚}、合七百三十六年也。自慶長十八年癸丑至元和八年、凡十年、都合七百六十年乎。」とあり、下巻一四丁裏に「咸通八年ハ、日本清和天王貞観九年ニアタル。至大永五年乙酉、六百六十一年也。至日本慶長十七年壬子七百四十八年也。至日本元和四年戊午、合七百五十四年也」とある。また下巻一一四丁裏にも「咸通八年日本清和天王貞観九年ニアタル、至大永五年乙酉六百五十八年也」という記述がみえる。他の抄と比べて引用される僧名は少ない。

④「臨濟録抄」、松ヶ岡文庫蔵(クハ・四九五)、写本、一冊、五四丁。臨濟録本文の行間に細字で抄文が記されている。表紙中央に「黄」と記した八角形の紙片が貼られ、左に外題として「臨濟慧照禪師語録」と記される。本文一丁裏に「蓋按自唐ノ十八代ノ主懿宗咸通八年丁亥孟陬十日大師示寂上、至^{ニテ}宋ノ八代ノ主徽宗宣和二年庚子^ス。凡^テ二百五十三年歟。又自^{ニテ}宣和二年^一至^{ニテ}本朝元和九年癸亥^一、凡五百回年歟。已上自^{ニテ}咸通八年示寂^一至^{ニテ}元和九年^一、亡慮七百五十七年也歟。」という年紀があり、また最終丁(五四丁)裏には「承天徹圓極備后松永承天寺藏書(印)」とある。(この承天寺とは広島県福山市松永町に所在する吸江山承天寺のことである。)なお「臨濟録 宗牧和尚寫 室町末期 一冊」と記した短冊型の遊紙あり。これまでこの「宗牧」は大徳寺七十二世の東溪宗牧(一二一七年寂)とされているが、抄文は妙心寺系の抄に基本的に一致している。元和九年の年紀も見えることから東溪宗牧の書写であるかどうか、疑問である。

⑤「臨濟録抄」、松ヶ岡文庫蔵(ハ・一一五八)、写本、二冊、小口書

に「白拈抄」とあり。上巻九二丁。(ただし上巻末尾に「紙数九卷丁」とある)、下巻一一一丁。下巻の奥書に「寛永拾年^{癸酉} 正月於正法下書焉 主示轄」とあり、「宗悦」と「廣沢」の朱印あり。また下巻一〇丁表には「咸通八年日本清和天王貞観九年ニアタル至大永五年乙酉六百五十八年也。又従大永五年至寛永元年甲子、百十四年也。合七百七十二年也」とある。

⑥「臨濟録鈔」、柳田聖山氏蔵、刊本(寛永七年、京都八尾助左衛門刊)、六巻、『臨濟録抄書集成』(中文出版社、一九八〇年刊)二〇五—三三〇頁に影印所収されている。

⑦「臨濟録鈔」、駒澤大学図書館蔵、刊本(寛永九年)、四巻四冊(一、三八丁、二、六三丁、三、四巻、六〇丁)、奥書に「寛永九壬申歲十二月吉旦 於二條玉屋町村上平樂寺開版」とあり。いわゆる「万安抄」といわれる抄である。^③『臨濟録抄書集成』三三二—四三九頁に影印所収。

⑧「臨濟録鈔」、松ヶ岡文庫蔵(クハ・五〇六)、写本、一冊、八六丁。題簽に「臨濟録鈔 ^{寛永抄本 崇福寺本}」とあり、また扉には「臨濟録抄崇福常住乙亥之春」とある。また最終丁には「抄云、自^{ニテ}咸通八年丁亥^一至^{ニテ}本朝長享三年己酉、凡^ッ得^{ニテ}五百六十三歳^一也、至^{ニテ}永禄十二年己巳^一、六百四十三歳歟。至^{ニテ}慶長八年癸卯^一、凡^ッ得^{ニテ}六百七十七歳^一歟。又、私^{ニテ}云、考^レ之^ヲ至^{ニテ}寛永九壬申^一、凡^ッ七百六十六歳^一という記述が見える。同年版行された⑧の万安抄と同じ系統の抄文を有するものの、それぞれの抄文はかなりの異同が見られる。

⑨「臨濟録聴書」(外題)、禅文化研究所蔵(ズ四一四三八)、写本、六八

丁。「大宗(宗弘)講二・心宗(悟溪宗頓)義二」・「仁岫(仁岫宗壽)云」・「東陽(英朝)禾上云」など、妙心寺派の僧(特に悟溪下)の語が引用されている。

【その他】

- ①「臨濟録鈔」(外題)、松ヶ岡文庫蔵(クハ・四九三)、写本、一冊、七六丁。表紙外題に「臨濟録鈔 全 失葉」・「鶴隱和尚御筆也」とあり、末尾(七七丁裏)に「臨濟録鈔中興鶴隱和尚眞蹟雖不全部莫紛失/仏日庵什物」とある。このように本抄は欠丁があるが、欠丁部分は最終部の一、二丁分と考えられる(『臨濟録』本文は大正蔵のテキストで五〇六頁下九行目の「長以孝聞」の部分まで扱われている)。書写した「鶴隱和尚」とは仏日庵旧蔵であったことを鑑みて、仏光派で夢窓下黄梅門派の鶴隱周音(慶長十七年寂)であろう。本抄は『臨濟録』全体の抄というよりは、本文中から難解な言句を選んで注解している。なお、「月庵和尚ハ止水不藏竜ト被仰」(一一丁裏)・「月庵下語云無孔笛中藏六律」(二二丁裏)とあり、黒川大円寺の月庵宗光の説が引用されており、撰述者が林下の僧であった可能性もある。なお本文四丁目に「咸通八年丁亥本邦人皇五十六清和天皇九年也。至長享元年丁未其間凡六百二十一年」とあり、抄の原型の成立が一五^(四八七)世紀に遡ることがわかる。
- ②「臨濟録良抄」、松ヶ岡文庫蔵(クハ・五〇〇)、写本、一冊、本文五四丁。題簽には「臨濟鈔 開善寺本」とあり、表紙右に「室町末期寫臨濟録良抄」とある。扉には「信岳伊那郡／疊秀山開善禪寺常住」と

あり。本抄は妙心寺系の臨濟録抄に屢々引用されるが、本抄中には「雲抄」や「梅云」とあつて雲谷玄祥と万里集九の語が引用されている。

- ③「臨濟録抄」、飯田市立中央図書館蔵、写本、一冊、一九七丁。本書は複数の筆致によつて書写されており、かつ『臨濟録』本文の順序と異なつて抄が構成されている。すなわち一丁から一五四丁までは上堂・示衆・勘弁の抄、一五五丁からは「臨濟録抄 興聖寺沙門圓耳集」と内題があつて序と行録の抄が配置されている。なお示衆の途中(「四種無相境」、大正、四九八c一八)に「御直筆ノ本云 慶長十一年丙午曆十二月八日至明年正月廿二日記之」(五一丁表)という記述が見られ、次の五二丁表から八一丁裏まで示衆の抄がなされ、再び示衆の「四種無相境」に戻つて抄文が付されている。雪翁(保盛)(六五丁裏・六六丁表)・大用和尚(養叟宗頤、一一丁裏)等の語が引用されている。
- ④「臨濟録抄」、京都府立総合資料館蔵、写本、三冊、各冊の題簽に「圓耳禪師直筆」とある。③の飯田市立中央図書館蔵の写本と内容はほぼ同一であるが、本写本は『臨濟録』本文と同じ順序で抄が付されている。③の写本は本写本をオリジナルとしている。

【曹洞宗】

- ①「臨濟和尚録」(題簽)、長興寺(長野県塩尻市)蔵、写本、一冊、五八丁、内題は「鎮岳臨濟惠照禪師ノ語録之抄」、表紙裏に「長國叟(花押)」あり。抄文は基本的に二行の割注。「竜宝」・「鳳宿」・「月庵和尚」

の語が引用されている。

②「臨濟録抄」、大安寺（長野市）藏、写本、一冊、三四丁。三四丁表に「○鎮州監濟慧照禪師之語録鈔終 于時元禄十六年末之十二月五日 万年山明松寺^二而書之者也」とあり、同丁裏に「海蛉沙門拜」とあり、書写者の名が見える。

③「臨濟録抄」（題簽）、貞祥寺（長野県佐久市）藏、写本、一冊、四〇丁。内題は「鎮州臨濟慧照禪師語録之鈔」、本抄は前掲の②の大安寺本と基本的に同内容であるが、末尾に「▲録中列祖宗派之圖」なる法系図が付されている。

さて以上の五山と山隣（大徳寺派・妙心寺派）林下（曹洞宗）の臨濟録抄の資料についてまとめてみたのであるが、やはり大徳寺派と妙心寺派の抄が多くを占めていることが理解されるであろう。また大徳寺派の抄①として位置づけた東福寺藏の「臨濟抄」は、建仁寺兩足院にて大永六年に書写された写本であり、いわゆる五山に伝わった抄である。しかるにこの抄は明らかに養叟宗頤等の林下大徳寺派の抄の特徴を示すものであり、十六世紀初頭の大永年間には五山においても林下の大徳寺派の抄が顧みられ伝授書写されていたことは大変興味深いものがある。

ところでこれらの資料を全体的かつ具体的な対照研究がなされて初めて臨濟録抄の系統的な整理がなされるべきであろう。この作業は碧巖録抄の資料的分量と比較するならば、少ないのではあるが、それでも臨濟録抄の全体的な対照はかなりの時間と労力を要するであろう。

しかしながら臨濟録本文を部分的に取り上げて、それに対する抄文を検討するならば、ある程度その抄の系統が明らかになる。また特に抄文中に引用される先行の抄や禅僧の語・解釈なども検討してみると、これらの抄は主に臨濟宗の大徳寺派と妙心寺派という大きな二つの流れがあり、右のリストに整理したごとくである。そして臨濟録本文に対する著語・下語などはやはり大徳寺派・妙心寺派のそれぞれの諸抄において、先行する抄の伝統を受け継いでいることが確認できるのであり、抄文が時代を下るに従って、先行の抄を重層的に取り入れて成立していることがわかる。これについては具体的な検討は末尾に各抄文の対照表に示すであろう。

ところでこれらの五山や林下の臨濟録抄で指摘されうるのは、本文に対する語釈の他に、著語によってその見解を披瀝する場合が大徳寺派・妙心寺派の抄に一般的に見ることができのことに對し、五山系の抄ではもっぱら語句の説明解釈に終始しているという点である。例えば現在所在が確認されていない『臨濟録梅庵抄』（積翠文庫旧藏）も後の抄に多く引用されているのであるが、その場合「梅ノ点ハ」とあって、本文の返り点や送りがなの打ち方が参考にされたり、「梅庵云」として語句の解釈が引用されているのである。（なお『臨濟録梅庵抄』は現在松ヶ岡文庫に所蔵されているとされるが、『新編禅籍目録』五二〇頁）、現在のところ所在が確認されていない。このような点は山隣において先行する抄を引用する場合、「□□著語云」といったように同派の先師や古徳達の著語の引用が見られるのと対照的であり、これは碧巖録抄の場合における五山系の抄（例えば『碧巖録不二抄』）と山隣・林下の抄の拈提の

傾向にもすで見られたことである。

ただここで問題となるのは、山隣の大徳寺派・妙心寺派の抄文に頻繁に見られる著語による拈提は、後で検討する密参録に見られる古則の拈提形式と重なるのであって、このような室内において示された著語による見解と、門下への提唱・垂示の中で成立していったと見られる抄に見られる著語と一致するかどうか、という点である。すなわち入室参禅という密々裡での公案商量と、抄のように提唱垂示等を通じて示される著語が一致するのであれば、入室参禅と提唱とが密接に関連しているということが確認されるのであろう。この点についてはおおよそ一致する傾向も見せるのであるが、ただ臨濟録抄の抄には、「密参ノ下語別チヤ」(駒澤大学蔵「臨濟録抄」、影印本、六〇・九九頁)・「密参ノ下語ハ大ニ別チヤ」(同、六七頁)という抄文も見られるのであり、やはり室内参禅と講義・提唱時との差別化も配慮されている⁽⁴⁾。

ところで上記の抄の中、妙心寺系の抄に見られる年紀(臨濟遷化の咸通八年からの経過年数を記す)の記述にはいくつかのパターンが見出せる。すなわち①京都大学文学部哲学閲覧室蔵本、②松ヶ岡文庫蔵(ハ・一一五七、一一二二)、③松ヶ岡文庫蔵(クハ・五〇七)④松ヶ岡文庫蔵(クハ・四九五)、⑤松ヶ岡文庫蔵(ハ・一一五八)「白拈抄」、⑥柳田聖山氏蔵、刊本(寛永七年、京都八尾助左衛門刊)、⑦寛永九年刊本「万安抄」、⑧松ヶ岡文庫蔵(クハ・五〇六)の年紀をまとめてみると次のようになる。

- | | |
|-------------------------|---|
| ①咸通八年 ^(八六七) | 永禄十二年 ^(二五六九) |
| ②咸通八年 ^(一四八九) | 長享三年 ^(一四八九) 永禄十二年 ^(一六〇三) 慶長八年 ^(一六〇三) |
| ③咸通八年 ^(四九二) | 明応元年 ^(一五二五) 大永五年 ^(一六〇〇) 慶長五年 ^(一六二八) 慶長十八年 ^(一六四三) 元和八年 ^(一六四三) |
| ④咸通八年 | 大永五年 ^(一六二二) 慶長十七年 ^(一六四二) 元和四年 ^(一六二二) |
| ⑤咸通八年 | 大永五年 ^(一六二四) 寛永元年 ^(一六二四) 寛永十年 ^(一六三三) |
| ⑥咸通八年 | 寛永七年 ^(一六三〇) |
| ⑦咸通八年 | 長享三年 ^(一六三三) 永禄十二年 ^(一六三三) 慶長八年 ^(一六三三) 寛永九年 ^(一六三三) |
| ⑧咸通八年 | 長享三年 ^(一六三三) 永禄十二年 ^(一六三三) 慶長八年 ^(一六三三) 寛永九年 ^(一六三三) |

すなわち長享三年^(一四八九)は②・⑧の抄、大永五年^(一五二五)は③・⑤の抄、永禄十二年^(一六〇三)は①・②・⑧の抄、慶長八年^(一六〇三)は②・⑧の抄にそれぞれ見出せるのである。この長享三年・大永五年・永禄十二年・慶長八年が何を意味しているのか、確実な結論は現時点では述べられないが、それぞれの抄が先行する抄に基づき重層的な構造となっているので、これらの年号は先行する抄の撰述年である可能性がある。これらの中、永禄十二年の年号を含んでいる①②⑧と大永五年を含む③④⑤に分かれていることが年紀上の点から指摘されうる。この場合特に注意されるのが②と⑧の抄であり、長享三年・永禄十二年・慶長八年の年紀を共通して有しており、その両抄の関連性が精査されるべきであろう。しかし②と⑧の抄はかなり分量的には差があり、②に比べて⑧はかなり簡潔になっており、同系統であるとはいえない。いずれにしても各抄同士の具体的で全体的な対照研究が必要であらう。

今本稿の末尾に示した資料Ⅰと資料Ⅱによって「臨濟三句」の中の「第一句」の抄について、対照してみるならば、妙心寺派系の「臨濟録抄」でも⑦『万安抄』・②『臨濟録抄』(ハ・一一五七)・⑧『臨濟録抄 宗福寺本』(クハ・五〇六)との系列と⑤「白拈抄」・③「臨濟録抄」(クハ五〇七)・④「臨濟録抄」(クハ四九五)の系列とに分けられるであろう。前者は特に「道樹」(景聰興島)の抄と「雲谷」(雲谷玄祥 汾陽寺「岐阜県武芸川町」開山)の抄を引用して、『五燈会元』巻五、『景德伝燈録』巻十二、『人天眼目』の臨濟伝の三句などを引用して説明するのであるが、後者の系列ではこうした「道樹」「雲谷」の説や『五燈会元』・『景德伝燈録』などは見られず、「事苑」(「祖庭事苑」)巻二の無着文喜の伝記を引用して解説していく。また大徳寺の東溪宗牧書写と伝えられてきた松ヶ岡文庫蔵のクハ・四九五の抄は大徳寺派のものではなく、妙心寺派の抄文に一致することがわかる。いずれにしても妙心寺派系の「臨濟録抄」が、年紀の上で永録十二年を記す①②⑧と大永五年を記す③④⑤に分かれていたことが、内容の対照によってこれと一致していることが確認できるのである。

ところで、「万安抄」では、しばしば「道云」・「道樹云」・「道抄云」とあつて景聰興島(道樹寺開山)の説が引用されているが、これとともに注目されるのが「護阜云」として多く引用される説である。柳田征司氏は前掲論文においてこれを景聰興島と推定されるが、弘治二年(一五五七)の快川紹喜の法語に「護阜快川野衲」とあるから(松ヶ岡文庫蔵、『乙津寺蔵書 中』「クハ・一五六〇」、三丁裏)、美濃神護山崇福寺にあった快川を指すと考えられる。

最後に曹洞系の臨濟録抄についてであるが、まず近世初頭に興聖寺を宇治に再興した万安英種の抄とされてきた抄物に含まれる『臨濟録鈔』が万安の撰述ではありえないことが中山成二氏の詳細な研究によって確認されている。

そこで洞門寺院に所蔵される上記の三写本について述べるならば、まず興味深い点は、これらがいずれも信州の洞門寺院に所蔵されていたということであろう。この中、長興寺蔵の「臨濟録抄」は、大燈国師(竜宝和尚)・月庵宗光などの説が見え、臨濟系の抄の影響が強いものである。しかし「臨濟ノ三句ト云ハ曹洞之三句トハ各別也。三句只一句也。機ニ望テ接示スル之義ナル間、位カイキウヲ以テハ弁スベカラズ。」という記述も見られ、臨濟系の説を参照しながら、洞門僧によってまとめられた抄と考えられるであろう。

次に大安寺と貞祥寺に所蔵される臨濟録抄は内容的に同一系統の写本であるが、この抄文には先行する抄や禅僧の説を引用する記事がまったく見られず、基本的に語義解釈を中心とする抄である。

『臨濟録』の洞門における受用は、冒頭に述べたように、代語文献や門参文献における『臨濟録』からの古則の引用とそれに対する見解として示されているが、現存する曹洞系の臨濟録抄には臨濟系の抄に対する批判や独自の見解が積極的に提示されるということはみられない。むしろ『臨濟録』に対する洞門の見解は、臨濟系の抄にいくつか引かれるのであり、これに対する批判もなされている。

例えば大徳寺派の抄には「劔刃上事」を身心脱落の境界とする曹洞宗の見解について言及しており、天文年間の大徳寺派の抄(松ヶ岡文庫

藏クハ・四九四)には「劔刃上事」の抄文に次のような記述が見られる。

洞家ニハ身心脱落、身心ナト云。ソレトハ大ニ別也。(上巻、二六丁裏)

また沢庵宗彭の師である一凍紹滴の抄(クハ・五〇二)にも次のような抄文を見ることができる。

上堂、僧問如何是劔刃上事。師云、禍事。

劔刃上ト云コト、洞下ナントニハ身心脱落ノ処ト云リ。此ハソノ様ナルコトニテナシ。禍事、ト云ハ劔刃ノ上ヲ云ヤウナレト、サテハナシ。別ニ子細アリ。(上巻、一七丁裏)

さらに大徳寺派の抄には同様の抄文が見られ、洞門の見解を批判的に見、同派の見方と対照的に位置づけている。なお、このような問答は妙心寺派の抄には見られない。

この他に注意されるのは、大徳寺派の抄に次のような月庵宗光と孤峰覚明(三光国師)の問答が引用されていることである。その用例を前出の天文年間の抄と一凍抄で見ると、次のごとくである。

〔天文抄〕

月庵問三光国師、三玄三要意旨如何。光云、蔵ル、処ヲ三玄ト云。顕処ヲ。三要ト云。月庵云、三光ハ洞家ニ遍参スル故ニ正偏ノ心ヲ以テ云也。僧問「月庵」、和尚ハ如何。菴云、佛祖難計ヲ三玄ト云、肝要ノ処ヲ三要ト云。(上巻、三六丁表一裏)

〔一凍抄〕

黒川ノ月庵問三光国師。如何是三玄三要。光云、玄ト云ハ隠

処。要ト云ハ顕処ソト。庵云、三光ハ洞下僧故、正偏テ云ソト也。

一僧云、和尚作广生。庵云、玄ト云ハ佛祖モ難レ測。玄要カト云肝

要ノ処ヲ指テ要ト云リ。(上巻、二二丁裏)

すなわちここに引用された問答は、瑩山紹瑾に参じた孤峰覚明に對して大応下の黒川大明寺(兵庫県朝来郡生野町黒川)開山月庵宗光が臨濟三玄三要について問うたものであるが、一凍抄では月庵が孤峰を洞下の僧としてみなしていることになっている。これは天文抄の「洞家ニ遍参スル故ニ」という伝承から転じた見方であろう。孤峰は出雲の雲樹寺等を開き、後醍醐天皇との密接な關係を有した済下僧であるが、当時の臨濟宗内における孤峰への見方がここに窺われ、興味深いものがある。

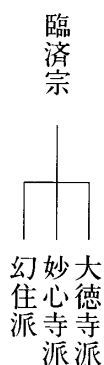
なお本稿の末に妙心寺派と大徳寺派の抄「臨濟三句」の第二句の部分の対照表を示した。各抄文において両派の解釈の仕方などが対照的に見られるのであるが、特に妙心寺派の抄については刊本万安抄の成立の問題もあり、さらに多くの資料の対照を必要とするのであるが、これについては今後の検討課題といたしたい。

三、臨濟録密参録の系統について

次に臨濟録密参録について検討してみたい。この臨濟録密参録とは臨濟録を公案として取り上げ、室内にてこれを参究するという過程において成立した文献である。この密参録についても金田弘氏の前掲論文に松ヶ岡文庫蔵の臨濟録密参録が紹介されているが、その他の所蔵文献を含めて以下に提示してみたい。この臨濟録密参録の文献群が、

臨濟録抄の場合と異なっている点は、まず林下の曹洞宗系の臨濟録密参録がみられないことである。前述のごとく中世曹洞宗の代語文献には臨濟録からも引用されており、また臨濟録所出の公案が、いわゆる洞門の密参文献、いわゆる門参文献に登場するのであるが、臨濟録そのものに対する密参は曹洞宗にはなかったようである。また臨濟録の密参録は幻住派にも見出され、大徳寺・妙心寺両派には見られない独特の商量が表示されているのであり、この点も臨濟録抄の文献群にはなかった点である。なお、この密参録資料を列举するにあたり、大徳寺派の臨濟録密参録には、同一の禅僧の密参録が数種伝えられているので、禅僧ごとにまとめてみた。⁽⁶⁾

臨濟録密参録



〔臨濟録密参録のリスト〕

【大徳寺派】

〔玉舟宗璠の密参録〕

- ①「臨濟録直記」(題簽)、駒澤大学図書館蔵、写本、三冊、三冊目の奥書に「本紙七十六枚 次ノ写ハ六十五枚 臨濟録 下吾弁 三冊 明應禅師所記也 貞享元甲子年八月廿一日染筆九月十日書終者也 六月十二日暮ヨリ染筆同十七日朝五ツニ出終 紙数五十八枚也」

- ②「臨濟録直記」、花園大学図書館陸川文庫蔵、写本、三卷、『臨濟録抄書集成』上巻に影印所収。

- ③「〔臨濟録密参〕」、松ヶ岡文庫蔵(ハ・一〇五四、一一三)、写本、上

中下三冊、各冊の表紙右に「貞享元甲子年八月廿一日染筆同廿九日終者也 五拾七枚 本紙七十五枚」(上巻)・「貞享元年甲子九月朔日染至同五日終者也 五十一枚 本紙六十五枚」(中巻)・「貞享元年甲子九月六日染筆同十日終也 六十二枚 本紙七十六枚」(下巻)とあり、また下巻最終丁の奥書には「臨濟録下吾弁、三冊、明應禅師所記也、貞享元甲子年八月廿一日染筆九月十日書終者也」とある。

- ④「明應禅師臨濟録秘抄」、松ヶ岡文庫蔵(クハ八六八、一一四)、写本、四冊。内容は前の①②③と同じ。第四冊の奥書に「臨濟録下吾弁 三冊 明應禅師也、貞享四丁卯七月三日書寫了(以上六十七則)終」とあり、『本朝高僧伝』の「明應禅師伝」が付記されている。ただしこれは空谷明應の伝記である。しかし第一巻の外題の左には朱筆で「大徳寺玉舟和尚室内秘本不許他見抄本也」とあるように、明應とは玉舟宗璠のことである。内容は前のハ・一〇五四と同じである。上海九華堂寶記製の翰墨縁という原稿用紙(タテの罫線)に近代書写されたもの。

〔沢庵宗彭の密参録〕

- ⑤「臨濟録秘抄」、松ヶ岡文庫蔵(クハ八七四、一一二)、写本、上下二冊、上巻五〇丁、下巻五五丁。上巻の扉に「此書澤庵老漢室中之臨濟録安巻秘辨而某禅徳之写本也。勿輕忽。雖然若向沢庵之文字言句裡見得。臨濟云、正法眼蔵、徳用不着不見、道滯言句覓解會、棹棒打月、隔靴爬痒、有甚交涉。切忌以此抄為祖関透得之金科玉條、噴大正癸亥三月 積翠軒主人」とある。

- ⑥「臨濟録秘辯」、松ヶ岡文庫蔵（ハ・三四）、写本、上下二冊、一〇五丁、上巻五〇丁、下巻五三丁。外題は「澤庵禪師 臨濟録秘辯」、前記のクハ八七四の近代の転写本。

【龍嶽宗劉の密参録】

- ⑦「臨濟録龍嶽和尚秘弁」、松ヶ岡文庫蔵（クハ・八七三）、写本、一冊、一三六丁。近代の転写本。扉に「臨濟 全」とあり、最終丁には「此寫本ノ元本ハ麻布祥雲寺塔中靈泉院密参箱中ニ秘在ス。大正拾参年書写ス」とある。

【その他】

- ⑧「臨濟録密参録」、松ヶ岡文庫蔵（ハ・一〇四七、一）、写本、一冊、三五丁。八冊にまとめられた八冊の大徳寺派密参録の一部。

【妙心寺派】

- ①「恵照録」、松ヶ岡文庫蔵（ハ・九五五・五）写本、一冊、五五丁（目錄一丁分含む、表紙なし）。「一、馬防一喝」から「三十六、瞎驢邊事」までの『臨濟録』中の三十六則に対する密参が四五丁表まで所収される。四六丁表から最終丁まで別に「臨濟三頓棒」・「無位真人」・「劍上話」・「璠堂首座相見」・「四喝」・「馬防偈」・「臨濟栽松」・「三句」・「竹菴三玄三要」・「正法眼蔵」の密参が付加されている。各文に「平」とあつて平語が、「着」とあつて妙心寺派の著語が示されているが、屢々「紫野句」として大徳寺派の著語も紹介されている。本密参録は碧前・碧岩・碧後の一連の六冊密参録の一部である。近代の転写本と思われる。

- ②「臨濟録密参録」、これは松ヶ岡文庫蔵「碧前碧後臨濟録密参録」（クハ・八八一、写本、一冊）に所収される密参録。

【幻住派】

- ①「臨濟録密参録」、松ヶ岡文庫蔵（クハ・八八三、一）、写本、一冊（八冊密参録の第一巻にあたり、表紙に「臨濟録四十四則 無門関四十二則」とある。）の四丁から五八丁。「師問興善話」から「到金牛」までの四十四則の密参が収められている。冒頭の密参には「延宝八庚申五月二十三日朝参」とあり、同年の「晦日暮」まで幻住派独特の拈提が見られる。

【古帆周信の密参録】

- ②「恵照録古帆密参記」（内題）、柳田聖山氏蔵、写本、『臨濟録抄書集成』（二一五―二〇三頁）に影印所収。奥書に「右六十一則古帆僧某甲従幼歳敲自他門之室模師家之命脈密参請益而録旃吾嗣法之徒之外雖宗門印可之知識不可授与之當門派傳授古則之内全篇無之者乎。」

- ③「臨濟録 古帆密参」（題簽）、松ヶ岡文庫蔵（クハ・一二四三）、写本、一冊、六六丁。奥書に「右六十一則古帆僧某甲従幼歳敲自他門之室模師家之命脈密参請益而録旃吾嗣法之徒之外雖宗門印可之知識不可授与之當門派傳授古則之内全篇無之者乎。維時寛永癸酉三月念五日 古帆叟周信誌之」とあり、②の奥書には見られない年紀と署名がある。

これらの臨濟録密参録の中で、大徳寺派の密参録に関して指摘しな

ければならないのが、①②③④の「明應禪師所記」とある『臨濟録直記』（あるいは「臨濟録秘抄」）である。この密参録はその「明應禪師」という記述から『禪籍目録』・『禪学大辞典』・『臨濟録抄書集成』において、これを空谷明応（二三三八―一四〇七）撰としてきたのであるが、この場合の「明應禪師」とは明らかに玉室宗珀（大徳寺百四十七世（一六四二）寛永十八年寂）の法嗣で、大徳寺一八五世の玉舟宗璠（寛永九年寂（一六六九））を指している。ちなみに玉舟の勅号は大徹明応禪師である。内容的にもこの『臨濟録直記』は近世初頭の大徳寺派の見解を反映している。なお「明應禪師所記」とある密参録は、この臨濟録密参録の他に存在し、それは「百五十則」に対する密参録（松ヶ岡文庫蔵、ハ・一〇四九とハ・一〇五五）と碧巖録に対する密参録（クハ・一）である。特に前者の一五〇則とは大徳寺派において中世末期から近世初頭にかけて成立した公案群であり、十四世紀から十五世紀初頭に出た五山派（夢窓派）の空谷明応ではありえない。いずれにしても玉舟のほぼ同一内容の密参録が四種類も見出されているのは、密参録文献においても珍しいことであるが、大徳寺派の室内参禅のありようを探る上で重要な文献であるといえるであろう。

またこうした密参録は、室内においてその見解が伝授され、ある程度下語・著語が固定化していることがわかるのであり、以下において沢庵宗彭の密参と伝えられる文献、あるいは龍嶽宗剣の臨濟録密参録について具体的に見るならば、次の如くである。今例示するのは臨濟三句といわれる機関の第二句についての拈提である。これは古来より解釈の相違を生んでいる箇所である。

（一）『臨濟録秘抄』（クハ・八七四）

△問如何是第二句。□下吾、豎窮三際、横該十方。師云、意旨如何。下吾、斬釘截鉄。又、截断紅塵ノ水一溪。又、滴水滴凍。弁、三句ノ中面力截断也。根本上何ノ問ヘキ事力有ウソ。妙解トハ何ヲ指タソ。智恵ヲ云タ。智ハ文殊也。文殊ノ根本智ノ上ニハ無着ノ可問モナイト打タ処截断也。漚和ハ方便説也。□ノ上也。小乗也。截流ハ大乘ソ。大乘ニハイタラヌト打タ処截断也。徹底用イキツタル上ニハヒトタマリモセヌト云心也。又純十方便説ハ截断ノ機ニハヨツテモツカヌト云也。^江機関ノ終リニモ打ツカ喝スルモ落居截断也。（一五丁裏―一六丁表）

（二）『臨濟録龍嶽和尚秘辨』（クハ・八七三）

問、如何是第二句。下、豎極三際、横該十方。師拶曰、意旨如何。下、斬釘切鉄。又、切断紅塵水一溪。又、切断衆流不留涓滴。又、滴水滴凍。弁、臨濟ハ三句ヲ簡要ニ用ル内デ第一ニ賊意ヲ用イ第一ニ賊意ヲ用イ、第二ニ切断ヲ用ルソ。師云、妙解豈容無着問、漚和爭負截流機。弁、妙解ハ真実ノ妙処ノ一也。無着ハ切断也。智恵也。サテ智恵ヲ以テ切断スル也。又、無着ヲ文殊トモ云フズト也。妙解豈容無着問トハ真実ノ妙処ヲ得テハ問フモ答フモ無ゾ。根本ノ上ニハ問フモ無レハ也。漚和ハ色相也。方便也。サテ色相ハ漚ノウキ沈ム如ク方便ヲ以テ

物ヲアヤツル也。切流ノ機ハ切断也。漚和一流機トハ根本ノ上ニ
ハ色相ト云「モ方便ト云」モ無ソト打テノクル也。臨濟モ切断ヲ
簡要ニ用ラル、ホトニ第二句ニ切断ヲ用ル也。私云、抄云、妙解
ハ文殊。又云、妙解ハ文殊ノ真諦也。漚和争負切流機トハ方便ノ
説法争及ニ真実切流ノ機ニヤト也。負ハ難及也・本弁ト相違也。

(二五丁裏—二六丁表)

(三)『臨濟録直記』(駒澤大学図書館、一二四・一、三四)

△如何是第二句。弁、第二句トハ種々ノ方便門ヲ云也。

(第一冊、一五丁表)

(四)『惠照録』(妙心寺派臨濟録密參録)

問、如何是第二句。師曰、妙解豈容無着問。

平、根本智ヲ具シタル文殊ノ境界ヘハ問端ヲ入レウス様ガ無ゾ。

拶云、サラウニハ爲ニ什麼ト四智トハ説タソ。

平、四智ト説モ元来無心チャ。

拶云、無心ナラハ四智ヲ離レヨ、看ン。

平、四智ヲモ無心ト見ルカ離ル、處チャ。

拶云、如何は無心底。

平、有智モ却テ無智ソ。

拶云、如何は無智。

平、空中ノ鳥跡ノ如シ。

(二二丁裏—二三丁表)

(五)『幻住派臨濟録密參録』(松ヶ岡文庫、クハ・八八三・一)

△師拶云、妙解ヲ云ヘ。学云、文殊テ宗。

心、利劔截断ノ時ハ無着ノ口タ、キモ入ラヌソ。畢竟截断ノ処テ
宗。

△師拶云、漚和ヲ云ヘ。学云、漚和ハ方便ニテ候。方便モ截断ノ時
ハ不入レ者テ宗。

(六)『臨濟録 古帆密參請益録』

問、如何是第二句。師云、妙解豈容無着問。

弁云、タヘナル解脱ノ人トハ文殊也。鈍ナル無着問「入ルマイソト
也。是ハ碧岩ニ文殊無着問答ノ処ニ備也。

漚和争負截流機。

弁云、漚和ハ方便也。截流機ハ文殊也。文殊ノ利劔「テ自己法界ノ

惡魔截断ノソ口也。

(影印本、一三三頁)

こうして大徳寺派・妙心寺派・幻住派の臨濟録密參を見ると、まず
大徳寺派の沢庵と龍嶽の密參の下語がほぼ一致し、また妙心寺派・幻
住派とは相違していることが確認されるであろう。ただ(三)の玉舟
の場合、「第二句」について簡略なものとなっており、下語も見えない
ので対照できない。

これに対し妙心寺派では、「平」とあって、漢文で示される著語とは
別に、口語体で表現される平語が加えられていることが知られるが、
これは「碧巖録密參録」などの資料においても同様である。

一方幻住派の密參録では「自己」・「法界」という観点から公案解釈
をする独特の拈提法がここにも見ることができる。この「自己」・「法
界」については拙稿を参照いただきたい。

注記

(1) この一韓と清三の法系は次のごとくである。

圓爾 — 癡兀大慧 — 嶺翁寂雲 — 天外寂晴

岐峰慧周

天順通祐

巖伯通噩

笑雲清三

笑嶽慧闇

孝仲光純

一韓智翹

(2) この他澤菴の「臨濟録抄」は、叡山文庫と妙心寺隣華院に写本がある。(筆者未見。柳田前掲論文、三八頁参照)

(3) この「万安抄」はその他多くの図書館や寺院に所蔵されており、柳田氏の前掲論文三八頁に紹介されている。なおこの他に京都府船井郡日野町の龍沢寺蔵の万安抄には永平寺二十三世秀察の署名・花押が付されている。

(4) この点についてはすでに飯塚大展氏によってその関連性が指摘されている。

(5) この他にも駒澤大学図書館蔵の「臨濟録抄」には「又、身心脱落トモ云ソ。何モヲカシイ事タ。別ニ子細カ有ソ。」(影印本、五〇—五二頁)

(6) なお、この他に松ヶ岡文庫に「臨濟録密参録」と外題のある写本(一冊、クハ・一二四二)が所蔵されている。これは臨濟録の冒頭の四則分の行巻であるが、南天棒等の室内の見解が示され、「積翠」の著語もみられることから、石井積翠軒の参禅に基づく近代の密参録と思われる。

(7) 拙稿「中世禅宗における幻住派の公案禅について」『印度学仏教学研究』第五十巻所収。参照。

〔追記〕

本稿を草するにあたり、北鎌倉松ヶ岡文庫の文庫長であられた古田紹欽先生・鎌田茂雄先生に大変お世話になりました。両先生とも本年相次いで遷化なされ、もうご指導いただく機会を得ないことに深い悲しみを覚えますが、ここに拙稿を献じ、両先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。なお現文庫長代理の石井修道先生、ならびに伴勝代氏には閲覧についてご高配いただきましたこと、厚く感謝申し上げます。

【資料Ⅰ】

〔妙心寺派系の臨濟録の対象表1〕 *ゴシックは『臨濟録』本文

| | | |
|--|--|---|
| <p>「臨濟録抄」(ハ一一五七) 上卷、三四丁裏—三六丁裏</p> | <p>『万安抄』(刊本) 第一卷、一七丁表—一八丁表</p> | <p>『臨濟鈔 宗福寺本』(クハ・五〇六) 三六丁裏—三七丁裏</p> |
| <p>問如何是第二句。是ハ真法也。言ハ第二句ハ第二義門、佛祖ヲ称提ス。第三句共ニ仏祖「把手俱行。</p> | <p>問如何是第二句。是ハ真法也。第二義門佛祖ヲ称提ス。</p> | <p>△上堂、問、如何是第二句。真法也。</p> |
| <p>師云、妙解豈容無著問、漚和爭負截流機。</p> | <p>師云、妙解豈ニ容ニ無著ノ問ヲ、漚和爭カ負ハニ截流ノ機ヲ。</p> | <p>△師云、妙解豈ニ容ニ無著問ニ。</p> |
| <p>護阜云、妙解ハ只智恵ノ方。</p> | <p>護阜云、妙解ハ只智解ノカタ也。</p> | |
| <p>或ハ、文殊不レ許ニ容無着問。漚和ハ方便也。妙解ノ上デ方便ハアルマイ。方便上モ截流ノ機ハアラウズ程ニ争負ニ截流機ニ。負カハニ点四ツアル也。</p> | <p>或抄云、文殊無着チヤ。文殊不レ許ニ容無着ノ問ヲ。漚和ハ方便也。妙解ノ上デ方便ハアルマイ。方便ノ上モ截流ノ機アラウズ呈ニ争負ニ截流ノ機ニ。負ハニ点四ツアルナル。</p> | <p>抄云、於ニ妙解ノ境界ニ無著ノ境界ヲハ不レ用也。妙解ハ文殊也。無着問答往覆ノ時、文殊即無著ノ問ヲ不レ放也。</p> |
| <p>道樹云、非文殊無着。</p> | <p>道樹云、非ニ文殊無着ニ。</p> | <p>抄云、道樹云、非ニ文殊無着ニ。</p> |
| <p>雲谷云、字面マデ也。妙ニ解。無着ハ當問ノ義也。</p> | <p>雲谷云、字面マデ也。妙解無シ著當ノ問ニ之義也。</p> | <p>雲谷云、字面マデ也。妙ニ解ニ無シ著當ノ問ニ之義也。</p> |
| <p>妙解ハ文殊ノ名トモ云。爰ハ只其義不可也。字面マデチヤ。漚和、梵ニ俱舍羅、此云、方便。私云、此一連ノ句与傳灯不異。碧ニ妙解作妙辨。爭負作不負也。</p> | <p>妙解ハ文殊ノ名トモ云。爰ハ只其義不可也。漚和ハ梵ニ俱舍羅、此ニ云レ方便ト。私云、此一連ノ句与傳灯不レ異。碧岩ニハ妙解ヲ作レ妙辨ト。爭負ヲ作レ不レ負。</p> | <p>妙解ハ文殊ノ名トモ云。爰ハ只其義不可也ト云。△漚和ハ梵ニ俱舍羅。此ニ云ニ方便ト。</p> |
| <p>道樹云、只拠本録、尤可也。文殊無着問答詳記碧三十五則。</p> | | |

鈔云、於ニ妙解ノ境界ニ無著ノ境界ヲ不用也。妙解ハ文殊ノ名也。文殊無着問答往覆ノ時、文殊即無着問ヲ不放。負ハカナハン也。或、ソムカン也。

異本云、嗣^ニ截流ノ機^ニ。亦、香象渡河徹底截流而過不周由者也。今云ハ方便說法ノ分齊ハ截流境界ニハ不可及也。

會元九。仰山惠寂法嗣杭州無着文喜禪師、喜禾語溪人也。姓朱氏云也。師直往五臺山華嚴寺、至金剛窟、礼謁云、師与文殊之問答詳見也。蓋一寺ヲヒヨツトシダイテ無着ヲ一宿セシメテ文殊問答也。其録、デチ、トカハル也。然モ凡ハ一ツ也。

○又餘録ノ林際録首書云、清凉傳云、釈無着姓董氏、詣牛頭忠禪師參受心要後至臺山、日將暮^{タチマチ}見寺宇鮮華絕世、自扣扉請入、有

抄云、於ニ妙解ノ境界ニ無著ノ境界ヲハ不用也。妙解ハ文殊ノ名也。文殊無着問答往覆ノ時、文殊即無着問ヲ不放也。

異本^ニ云、嗣^ニ截流ノ機^ニ。截流ノ機ハ者、香象ハ渡^ル河^ニ徹^ス底^ニ截^テ流^ヲ而過^テ、不^レ周由者也。今云ハ方便說法ノ分齊ハ截流ノ境界ニハ不可及也。

或抄云、妙解——漚和——機。此句ハ二点ニ説アリ。一ニハ文殊ノ妙解ハ根本智也。非^レ所^ニ諸人ノ可^レ及測。然^レトモ文殊ノ慈悲方便暫不^レ負^ニ無著截流ノ機^ニ相見問答スル也。此時ハ豈^ハ容爭^カ負^カン也。二ニハ漚和ハ無着也。截流ノ機ハ文殊也。無著相見ノ時不^レ負^ニ文殊ノ截流ノ機^ニ也。此時ハ豈^ハ容爭^カ負^カン也。腰ニク、リツケ背ニ負^エマイ也。

或云、漚和ハ兔也。截流ハ香象也。如来祖師禪也。

○會元九 仰山ノ惠寂ノ法嗣杭州無着ノ文喜禪師ハ嘉禾語溪人也。姓ハ朱氏云々。師直^ニ往^ニ五臺山華嚴寺^ニ至^ニ金剛窟^ニ礼謁云々。師与^レ文殊之問答詳見也。蓋^シ一寺ヲヒヨツトシダイテ無着ヲ一宿セシメテ文殊問答也。其録、デチ、トカハル也。然^レドモ凡ハ一ツ也。

或首書云、清凉傳曰、釈無着、姓ハ董氏、詣^ニ牛頭忠禪師^ニ參^ニ受心要^ヲ。後^ニ至^ニ臺山^ニ、日將^ニ暮^ニ候^ニ見^ニ寺宇鮮花絕世^ニ、自扣^レ扉

第一句第二句第三句、或云、此三句ハ克符道者ノ問也。
第一句ハ理。第二ハ智、第三句ハ方便也。

△截流ノ機者、香象ハ渡^ル河^ニ徹^ス底^ニ截^テ流^ヲ而過^テ、不^レ周由者也。今云ハ方便說法ノ分齊^ハ截流ノ境界ニハ不可及也。

或云、漚和ハ兔也。截流ハ香象也。如来禪、祖師禪也。

童子啓扉出應云、。

私云、是事苑ノ義也。見碧三十五則。又統紀通塞志等ノハ又少カハル也。何ニ碧三十五本則、文殊無着問答。此義也。少ノカハリコソアレ。南方佛法如何住持スノ問答、何レニモアル也。蓋傳灯無着ノ章ニハ与文殊相見機縁無之。

傳灯十二。仰山寂法嗣杭州龍泉文喜禪師嘉禾蒨兒人也。姓朱氏云、号曰、無着云、与文殊問答之機縁無之。餘ノ録ニハ何レニモ与文殊問答見ヘタリ。

○人天眼目林際傳三句。師因僧問、如何是真仏眞法眞道乞師開示。師曰、佛者ト云ハ心清淨是ナリ。法者ト云ハ是心光明是ナリ。道者ト云ハ処々無礙淨光是ナリ。三即一、皆是空、名テ而無ニ実有一如ハ眞正ノ作道人ノ念々不ニ間斷、自下達磨大師從レ西天来上テ祇是レ覺下今不レ受二人惑一底ノ人上、後ニ遇一祖一言ニ便了始知從前虚、用乙工夫甲。山僧今日見処与仏祖不別、若第一句中薦得堪与二祖仏一為上レ師ト。若第二句中薦得堪与二天人一為上レ師ト。若第一句中薦得自救不了。

問如何是真仏ヨリ爰ノ自救不了マテ此録中ニアリ。

僧問如何是第一句。師曰、三要印開朱点窄未容擬議主賓分。如何是第二句。師云、妙解豈容無着問、漚和争負截流機。如何是第三句。師云、但看棚頭弄傀儡、抽牽全籍裡頭人。

請入「有」童子啓扉出應云、。

私云、是ハ事苑ノ義也。見ニ碧三十五則一。

傳灯十二ニ仰山寂法嗣杭州龍泉文喜禪師嘉禾蒨兒人ナリ。姓ハ朱氏云々。号ノ曰レ無着ト云々。蓋シ傳灯無着ノ章ニハ与レ文殊相見ノ機縁無レ之。餘ノ録ニハ何レニモ南方ノ佛法如何ガ住持スノ問答アル也。

又云、人天眼目林際ノ傳、或ハ此ノ録中ニ真佛眞法眞道ノ事詳也。字少異。

私云、以人天眼目見則林際三句ト云ハ、真佛真法真道也。

漚和ハ方便也。事苑云、梵云、俱舍羅。此言方便。或作烏和。此句二点二説アリ。一ニハ文殊ノ妙解ハ根本智也。非レ所ニ諸人可ニ及測一。然レ文殊ノ慈悲方便暫不レ負ニ無著截流機一相見問答也。此時ハ豈レヤ容シ争カ負カン也。一ニハ漚和ハ無著也。截流機ハ文殊也。無著相見時、不レ負ニ文殊截流機也。此時ハ豈容シヤ。争負ヲフン也。背ニ負イ腰ニク、リツケツケユマイ也。第二句ト云ヘハ是中根器也。故許些子漏逗。又漚和ハ兔也截流ハ。香象也。如来禪、祖師禪也。畢竟漚和モ截流モ一ツ也。又云、文殊与無著問答、豈非方便。私云、諸祖各方便也。又具截流機也。此義可也。

○或抄云、無著ハ非人之名。只着スルナキ問也。然レ妙解モ妙ニ解スルナルベシ。妙解ノ上ニハ着スルナキ問ヲモユルスマイ也。妙解ハ智。漚和方便也。々々ハ、イカテ截流機ヲワフン也。漚和ハ如兔、截流ハ如香象也。

私云、蓋林際ノ三句ト云ハ真佛真法真道也。

【資料Ⅱ】

〔妙心寺派系の臨濟録の対象表2〕

| | | |
|---|---|------------------------|
| <p>「白拈抄」(ハ・一一五八) (二六丁裏―三七丁裏)</p> | <p>「臨濟録抄」(クハ・五〇七) (三四丁裏―三六丁表)</p> | <p>「臨濟録抄」(クハ・四九五)</p> |
| <p>問如何是第二句。コレハ真法ナリ。</p> | <p>問如何是第二句。コレハ真法也。</p> | <p>如何是第二句。真法也。句中玄。</p> |
| <p>師云、妙解豈_レ容_ニ無著_ノ問_一、漚和爭_カ負_ニハ_ン截流_ノ機_一。</p> | <p>師云、妙解豈_レ容_ニ無著_ノ問_一、漚和爭_カ負_ニハ_ン截流_ノ機_一。</p> | <p>師云、妙——ハ智也。</p> |
| <p>先ッ妙解ハ文殊也。無着ハ五臺山テ逢文殊無着文喜禪師也。<small>仰山ノ弟子也</small>。杭州人也。見碧岩卅五則。</p> | <p>先ッ妙解文殊也。無着ハ五臺山ニテ逢、文殊無着文喜禪師也。見碧岩三十五則。</p> | |
| <p>漚和ハ方便也。</p> | | |
| <p>或抄云、無着ハ非人之名。只着スル_ノナキ問也。然レハ妙解モ解スルナルベシ。妙解ノ上ニハ著スル_ノナキ問ヲモ、ユルスマイ也。妙解ハ智。漚和ハ方便也。方便ハイカテ截流機ヲワンソナリ。漚和ハ如兔、截流ハ如香象也。</p> | | |

持タリトモ截流ノ機ヲハ、エラスマイソ。

事苑云、梵云、俱舍羅。此言方便。或作鳥和。此句二点二説アル也。一ニハ、文殊妙解ハ根本智也。非レ所_三諸人可_二及_レ測_一。然レ_レ文殊慈悲方便暫不_レ負_二無_一著截流機ニ相見問答也。此時ハ豈_レ容_二ユルサン_一爭負_二ソムカン_一也。二ニハ、漚和ハ無着也。截流機ハ文殊也。無着相見時、不_レ負_二文殊截流機_一也。此時ハ豈_レ容_二イレン_一爭負_二ソムカン_一也。背_二負_一腰ニク、リツケエマイ也。第二句ト云ヘハ是中根器也。應中根云、故許些字漏逗。又漚和兔也。截流、香象也。如来禪、祖師禪也。畢竟漚和モ截流モ一ツ也。又云、文殊与無着問答、豈非方便。私曰、諸祖各方便也。又具截流機也。此義可也。

○事苑第二。無着姓董氏、永嘉人。年十二依竜泉寺椅律師出家、天宝八年因謁金陵牛頭山忠禪師參_レ受心要。

清凉傳云、釈無着姓董氏、詣牛頭忠禪師參受心要、後至臺山日將暮、倏見寺宇鱗華、因扣扉請_レ入、有童子啓扉出應。無着請童子以寓宿。童子延無着入。僧問師自何方来。着具對。又曰、彼方佛法如何住持。答曰、時逢像季随分戒律。復問衆有_レ機_一。答曰、或三百、或五百。著曰、此処佛法如何。答曰、竜蛇混雜、凡聖同居。又問衆有_レ機_一。答曰、前三々後三々。著良久無對。僧曰、解否。答曰、不解。曰、既不解之須引去。童子送出門。著云、此

事苑云、梵云、俱舍羅。此言方便。或鳥和。此句二点二説アリ。一ニハ、文殊ノ妙解ハ根本也、智也。非_レ所_三諸人ノ可_二及_レ測_一。然_レレ_レ文殊慈悲方便暫不_レ負_二無_一着截流機ニ相見問答也。此時ハ豈_レ容_二ユルサン_一爭_二カ_一負_二ソムカン_一也。二ニハ、漚和ハ無着也。截流機ハ文殊也。無着相見の時、不_レ負_二文殊截流機_一也。此時ハ豈_レ容_二争_二負_一ソムカン_一也。背_二負_一腰ニク、リツケエマイ也。第二句ト云ヘハ是中根器也。故許些子漏逗。又漚和ハ兔也、截流ハ香象也。如来禪、祖師禪也。畢竟漚和モ截流モ一ツ也。又云、文殊与無着問答、豈非方便。私曰、諸祖各方便也。又具截流機也。此義可也。

○事苑第二。無着姓董氏、永嘉人。年十二依竜泉寺椅律師出家、天宝八年因謁金陵牛頭山忠禪師參_レ受心要。

清凉傳云、釈無着姓董氏、詣牛頭忠禪師參受心要、後至臺山日將暮、倏見寺宇鮮華、因扣扉請_レ入、有童子啓出應。無着請童子以寓宿。童子延無着入。僧問師自何方来。着具對。又曰、彼方仏法如何住持。答曰、時逢像季随分戒律。復問衆有_レ機_一。答曰、或三百、或五百。着云、此処仏法如何。答曰、竜蛇混雜、凡聖同居。又問衆有_レ機_一。答曰、前三々後三々。着良久無對。僧曰、解否。答曰、不解。曰、不解之須引去。童子送出門。着云、此寺何名。

文殊根本智。非_{スレ}所_三諸人可_二及_レ側_一。

解 妙ニ解スル也。妙解ノ上ニハ着スルナ
キ。豈_二容_二ニ_一ヤ無_一著ノ問_一。

| | | |
|--|--|--|
| <p>寺何名。曰、清涼寺。童子曰、向所問、前三々後三々、師解否。曰、不解。童子曰、金剛背後汝可觀之、即隱。著愴然久有偈云く。又碧岩有卅五則少異也。</p> | <p>曰、清涼寺。童子向所問、前三々後三々、師解否。曰、不解。童子曰、金剛背後汝可觀之、即隱。著愴然久有偈云く。又碧岩有卅五則少異也。</p> | |
| <p>今此^ニ所^レ言無着^ハ、非^ニ無着菩薩及^ヒ尼無着^ニ是言仰山弟子無着文善禪師也。杭州人也。漚和梵云、俱舍羅。此云方便。或以鳥和。此句垂手消息也。</p> <p>疑^{クハ}於^ニ此句義^ニ不^レ可^レ取乎。蓋^シ妙解^{ト云ハ}者偽乎。己心妙体解得之謂也。無着^ト者無^レ着^ニ「万法^ニ之謂也。</p> <p>漚和者方便之梵語也。截流機^ト者、祖師禪頓機ノ之謂也。然^{ラハ}妙体解得也。第一義諦、言句不到之田地ナリ。於^ニ恁^レ廣之田地^ニ者縱^イ無^レ着^ニ万法之一問。亦早^ク涉^ニ言句^ニ。豈許^ニ容^レセンヤ之乎。雖^ニ然^モ如^レナリト是從上ノ祖師、佛不^レ獲^レ己、而權開^ニ化門^一。方便度生^ス。其ノ施設應^ニ中下根器^ニ也。恁^レ廣則他門之ノ方便爭^カ敢^テ辜^ニ負^{センヤ}祖師禪之本意^ニ乎。是故^ニ有^レ權有^レ實有照有^レ用。豈僻^ニ可^レ守^ニ一隅^一哉。</p> | <p>今此^ニ所^レ言無着^ハ、非^ニ無着菩薩及^ヒ尼無着^ニ是言仰山弟子無着文善禪師也。杭州人也。漚和梵云、俱舍羅。此云方便。或作鳥和。此句垂手消息也。</p> | <p>漚和ワ方便也。 爭負^{ヲワン}ニ截流ノ機^ニ</p> |
| | <p>或抄云、無着^ハ、非人之名、只着^{スル}ナキ問也。然^レハ妙解^モ妙二解スルナルベシ。妙解ノ上ニハ着スル^ノナキ問ヲモユルスマイ也。妙解ハ智。</p> <p>漚和方便也。方便ハイカテ截流機ヲ負ソナリ。漚和ハ如兔、截流ハ如香象也。</p> | |

【資料Ⅲ】

〔大德寺派系の臨濟録の対象表〕

| | | |
|--|---|--|
| 天文抄（クハ・四九四） 上卷、三三丁裏—三三丁裏 | 一凍抄（クハ・五〇二） 上卷、二二丁裏—二二丁表 | 沢庵抄（ハ・一一五六） 第一卷、五五丁裏—五六丁表 |
| 問、如何是第二句。師云、妙解豈容無着問。 | 問、如何是第二句。師云、妙解豈容無着問。 漚和爭負 ^カ 截流 ^ニ 機 ^ヲ 。 | 問、如何是第二句。師云、妙解豈容無着問。 漚和爭負 ^カ 截流 ^ニ 機 ^ヲ 。 |
| ○妙解ハ文殊也。無着ハ文喜禪師也。永嘉人也。唐天宝中、五臺テ文殊ニ逢タル ^一 也。此ハ利根ト鈍トヲ云ソ。无着ハ文殊ニヨツテモツクマイソ。 碧三十五則。文殊問无着近离什 ^一 諸ソ。无着云、南方。殊云、南方仏法如何住持。着云、末法比丘少奉 ^{タモツ} 戒律 ^ヲ 。殊云、多少衆 ^ソ 。着云、或三百、或五百。无着問文殊、此間如何住持。殊云、竜蛇混雜、凡聖同居。着云、多少衆。殊云、前三、後三。 或抄云、妙解智過也。此処不容无着之所問也。一義云、妙解作文殊非也。如字面可見。 或抄云、无着ハ无着當也。 | 第二句ノ点也 ○妙解ハ文殊也。無着ハ仰山ノ弟子文喜禪師ト云人也。文殊ト問答シタ人也。 | 妙解ハ文殊也。無着ハ文喜禪師也。前三々後三々ト答ル底截流機也。 ^玉 方便門中有 ^ラ 什 ^一 ノ截流機 ^カ 底 ^一 此ノ三句ハ克符道者ノ問也。 或抄云、妙解ハ文殊ノ真諦也。 |
| 漚和爭負截流機。 ○梵語也。又ハ烏和 ^ヒ 云ソ。漚ハ水ノタマツタ処ニアルアワ也。コ、ハ方便也。截流機トハ大乘ノ機根ヲ云ソ。通ツタ性ヲ云ソ。又ハ截断ソ。截流ノ ^一 ハ涅槃ヨリ出。涅槃云、声聞縁覚及大菩薩、同在佛所、聞仏説一味之法、 | 漚和ハ方便俗諦也。 截流 ^一 トハ截断ノ境界ナリ。言ハ無着ノ鈍遅ナル機ハ文殊ノ利根ナル境界ニ及ヒ難キ也。言ハ方便ヲ説ク分濟テハ截流ノ境界ニ不 ^レ 可 ^レ 及ト云。故ニ文殊ハ無着。句ヲ負トヨムハ非 | 漚和、梵ニハ俱舍羅。此翻 ^ニ 方便 ^一 。方便智也。俗諦也。漚和ハ小流也。小流ノ落留ル処ノ漚ノ有ルヲ漚和ト云。作 ^ニ 烏 ^一 和即方便門也。截流機者、不 ^レ 借 ^ニ 方便門 ^一 ヲ負字旧ハ副字也。洪覚範改作 ^レ 副字於好副 ^ニ 截流ノ機 ^一 。 |

然其所證。各有淺深。譬兔馬象三獸渡河。兔渡則浮。馬渡及半。唯大香象徹底截流。漚和ハ无着ノ方也。截流ハ文殊ノ方也。言ハ方便ノ機ヲ持タリトモ截流ノ機ヲハ、エラレマイソ。負^{カナハン}當点ソ。ヲワンハ、ヲヒンヤノ心也。

也。第二句ノ本意ニカナワス。又負字作^レ副ト本アリ。其モ好シ。其時ハ副^{カナハント}ヨム也。不^レ及意。兔ハ上ヲ走ル。馬ハ中ヲヲヨク、象ハ底ヲ一文字ニワタル。截流ノ機トハ象ノ河ヲワタルヲ云リ。上根ニトル。

又、僧宝傳風穴ノ傳ニ作ニ漚和爭力赴ニ截流機ニ負作^レ赴^ト尤好截流機者香象ノ渡^ル河ヲ截^テ流ヲ徹底^ニ而過^テ不^ニ因由^セ、人^一言ハ方便ノ說法争^テカ及^ニ真宝截流ノ機^ニ也。是第二句之兒也。又通論ニ廿五卷ニ妙解ハ妙悟也。非^レ云ニ文殊^一、無着ハ無^レ着^{スル}非^ニ文喜^一。此時モ截断也。無住着処ヲモ不用也。先師云、此義非也。^五於妙解境界ニ不^レ用^ニ得無着境界^一義也。文殊無着問答往後ノ時、文殊即不^レ放^ニ無着^一問^一也。文殊末後ニ云、前三々後三々。無着者仰山ノ弟子文喜也。与林才同時也。唐ノ風穴ノ風度ハ人□ノ見無キニ依テ此當代ノ人ノ語ヲ用ル也。